

平成23年度政務調査事業報告書

調査日時 11月3日

調査場所 札幌市

調査事項

平成23年度わが村は美しくー北海道ネットワーク・フォーラム
持続可能なまちづくり、むらづくり「スローな未来へ」

調査目的

自然豊かなわが町で、衣食住を含めたスローな生活と豊かさのあるまちづくりをするために、いま、何が求められているかを思考する。

北海道のさまざまな地域活動を、景観と人との交流、地域物産などに注目して支援し、広く知つてもらう目的の「わが村は美しく」の運動で、平成13年から北海道開発局で始まり、それを後方支援する北海道ネットワークが開催した。

基調講演 「スローな未来へ」

ノンフィクション作家・島村 菜津 氏



一番守らなければならないものを失っていく

島村氏は基調講演で、イタリアで始まったスローフード運動で、日本では2000年にスローフード運動の支部が各地にできて、北海道でもすばらしいメンバーが揃い、スローフードの風が吹いていました。ところが、「スローフード」という言葉が広まる一方で、大型商業店舗法の改正でどんどんチェーン店が進出し、商店街が変貌している。

私たちは何か予期しないことが起きたときには、一番守らなければならないことを失っていく。スローフードに一見追い風が吹いているように見えても、現実はまだ厳しい戦いが続いている。グローバル化の底には、格差があり、守りたいものを失ってしまう現実がある。この危機的な日本の状況のなかで、スローフード運動を必死に支えている農家や漁家の人たち、加工に取り組む人たちを守りきれるのかという瀬戸際にいる。

スローフード運動とスローシティ運動はイコールだ。この運動に97年ごろからのめり込んだ。スローフードが流行言葉ではなく本物になっていくためには、地元がある人、毎日食卓で子どもと一緒にスローフードを考えていく人、ちょっと認知症になりつつある自分の両親と今日の食生活を考えていく人、そういう人たちとスローフードという言葉をもう一度考え直して見ることです。



地方都市が豊かな農村に生まれ変わった理由

1950年代から70年代にかけてイタリアの地方都市で劇的な都市への人口流失が起こる。イタリアのスローシティ運動の中心となってたトスカーナ州でも、ワインの生産者の200人以上いた後継者の中で残ったのは数人だったという。

その要因は、ワインの大量生産、フランスの10分の1になり農家はひどい惨状となった。その様な状況を経緯して、バローロ地方やトスカーナ州が豊かな農村に生まれ変わったのは、「産業革命によって生まれた都市生活が必ずしも幸福でなかった」という反省。さらに公害問題や子育てに不安を感じる都市から逃げ出す住民が増えたことだった。

更に、都市住民が地方にあこがれの目を向けたこと。水がよくて食べ物があって、空気がよい農村を子育ての場、第2の人生の場として選び始めたことだった。

どこにでもある大型ショッピングコンプレックスはいらない

トスカーナの農村など多くの農村で、2004年イタリアで初めて景観法を利用し、大型ショッピングセンターが進出できない仕組みを作った。80年代の半ばには、在来品種を見直そうという動きが生まれ「地元にあるすごい食文化、その季節に地元でしか作れない産物の貴重さを地元の人がアピールしないで誰がするのだ」という意識が育った。

イタリアのスローシティで大きな課題はエネルギーの自給。地中海地方では風がよく吹く、地中熱などによるエネルギーの自給に知恵を絞っている。

市街地にもベンチがあるか

スローシティ運動で、ハンディーを持った人やお年寄りが住みやすい町なのかということ。スローシティに取り組む町には「観光客の多い旧市街地だけでなく、地元で暮らす市街地にも十分ベンチがある」かであり、お年寄りのおばあちゃんたちがゆっくり歩いて一息付ける。世間話をしたり、地産地消の個人商店で買い物ができる。これまでの生活環境が崩れそうなら、もう一度再生しようという考えが、日本では一番欠けていると思う。

郷土愛が地元の活性化の第一

郷土愛が地元の活性化の第一条件だ。若い世代が子どもたちを育てていくのに、いまの環境でよいのだろうか？次の世代に申し訳ないんじゃないのか？と思い、少し歩いたり、自転車で移動すると周辺に野菜を作る人がいて、海を眺めたり山を眺めれば気持ちが晴れ晴れする自然があって、よい水がある。そういう地域こそ、よい生活のモデルが生まれてくるものだ。

食べて生きている以上は、皆同じ地縁に立っている。自分が食べている物を自然からどのような形で取り組むのか。幸せな形で取り込めて、頂いている自然を苦しめずに、子どもたちの世代にも存続していく形で付き合っていくかが、スローフード本質の意味だと考えますと結びました。

島村氏の講演の後、まちづくりに向けた取り組みをしている、各団体からのアピールが行われた。

パネルディスカッション

「“ずっと暮らし続けたい”北海道のまち、北海道のむら」

パネラー

かとうけいこ 氏(一般社団法人シーニックバイウエイ支援センター広報部長)

杉 一浩お 氏(NPO法人「日本で最も美しい村」連合理事)

有山 忠男 氏(NPO法人人ガーデンアイランド北海道事務局長)

小川 巖 氏(エコ・ネットワーク代表)

大黒 宏 氏(オホーツク・テロワーク代表)

アドバイザー

島村 菜津 氏(作家・日本スローフード運動の先駆け)

コーディネーター

中井 和子 氏(NPO法人わが村は美しくー北海道ネットワーク理事長)

パネルディスカッションでは、以下のことが議論された。



地域の良いものをどのようにアピールするか

「わが村は美しく」運動は北海道開発局が平成13年に、北海道のさまざまな地域活動を景観と人との交流、地域物産などを表彰しながら小さな取り組みであっても広く知ってもらう。三つが揃った地域はすばらしい地域活性化、あるいは観光資源としてヒントになるのではと考え、それを後方から支援している。

「美しい景観」「地域特産物」「人との交流」は地域を魅力的にし、美しい農村づくりに寄与する。豊かな自然は人を引きつける魅力がある。活性化で大事なのは人が集まること。

気づくために感性を磨く、感じる目や心を持つ

風景や食べ物、歴史・文化が現状の中にまだまだあるのに、それに気づくために感性を磨く、感じる目を持つことが大事。身近にあるすばらしい教材、資源を次世代の子どもたちの教育に活用し、郷土愛を育むこと。

開拓の歴史をつなぐフットパス

フットパスの性格と目的は、一つには農と食、二つには地域振興、三つ目には観光、四つ目は自然保護、五つ目景観、六つ目歴史、七つ目交流、八つ目が健康のそれが重複しながら進めいくこと。北海道には徳川幕府時代の古道が各地にあり、郷土の歴史に興味のある人々が甦らせ

ている。フットパスで歩いて一泊できるコウスをつくる。歴史を学ぶ楽しみを生み出すこともできる。大自然の中でごく自然な形で咲いている野の花を楽しませることもできる。

「持っているものを引き出す」がキーワード

大切なのは、地元の人が自分の町をまず歩いて眺めてみること。そして地元のものをもう一回食べてみること。地元の人、隣の人がすごく良いものを作っていることに気づいていないこと。あつとと思ったら話しかけてみる。その発見から地元の人を呼び寄せる、若者たちがわくわくする新しい仕事、生業が生まれてくるのでは。

もう一度自分たちの魅力を町民に周知徹底して、町外にPRして、それをどうやって生かしていくのかを考えることが大事。自分の町の良いところを知る。そしてそれを守っていくことも大事。

自分たちの尺度、毎日の生活の中で、自然、歴史・文化に触れながら守っていくという人づくり、教育が非常に重要だ。歴史とか伝統は本物志向でなければならないし、イミテーションや真似事ではだめ。

自分たちの町にある歴史を感じられる物、伝統文化は大事に継承しなければいけない、それを良い形で人々に提供していくことに結び付けること。

農業も同じだ。農業は多面的な価値を持っている。物作りだけでなく景観的にも人々の癒しの場でもある。そういう価値を自分たちはやっているという精神が大事である。

それぞれの地域のすばらしさに気づいて、それを伝えていく子どもと人材の育成が重要で、色々な活動が広域的に連携していけば、もっと大きな可能性につながっていく。

パネラーの皆さん、それぞれの立場で議論し提起された。

わが町の今後のあり方と方策

議会活動のライフワークとして、わが町の豊かな自然と歴史文化を一人ひとりの町民が誇りを持ち、おもてなしのできるまちづくりについて提起してきたが、今回政務調査活動「持続可能なまちづくり、むらづくり=スローな未来へ」に出席して、ライフワーク活動の位置付けが、島村菜津氏の基調講演や、パネルディスカッションでの議論を聞いて、更なる確信と思いを強めることができた。

豊かな自然環境に恵まれて暮らしている町の独りひとりが、着飾らない当たり前である普段の衣食住の暮らしを、今一度自分たちの尺度で見直しながら、次世代の子どもたちに誇りを持たせていくために、大人が何をすべきかを議論していくことが必要だと考える。